村岡典嗣教授における思想史の方法

――特に価値観と歴史叙述の関連について――

梅沢伊勢三

一

村岡典嗣教授の学問的業績を概観して見出される一つの顕著な特質は、日本思想史の実際研究と共に、一方これと平行して、その学問の本質や方法に対する理論的な反省と追求とが絶えず実行され続けているということである。その講義や著作の中に、「学問論」あるいは「方法論」とみなされるものが、しばしば繰返されている事実は、よくそのことを物語るものである。たしかに教授にとって、「日本思想史」という新たな学問の理論や方法の確立ということは、その学究生活における一つの重要な関心事であったということができるのである。

そうした追求の結果として残された教授の日本思想史論は、学問的本質論をはじめ、方法論研究法などの各般に亘っており、その全体的な理解と把握のためには、当然これらの総体について組織的綜合的な考察がなされねばならぬわけであるが、それは到底この小稿の目的とし得るところではない。ここでは特に視点を限定し、思想史学の方法論上一つの重要論題ともいうべき「価値観と歴史叙述との連関」という問題に関して教授の学問論方法論の一班を探ってみようと思う。勿論そこにみられる理論が、現代の思想史家の様々の立場からみて、全く批判や異論の余地の無いものであるということはできない。しかしここではそうした批判的考察にも立ち入ることはあえて避け、ともかく教授の理論や主張が果してどのようなものであったかの紹介を主目的としてこの稿を進めたいと思う。

思想史の主たる研究対象が、人間の文化活動特にいわゆる精神活動とその成果に関与するものである以上、そこに何らかの形で価値の問題が介在せざるを得ぬことは論を俟たぬところである。では思想史は一つの史学として、あらゆる文化財あるいは文化現象に内在する価値を、いかなる視点からいかに把え、いかに「認識された歴史」として処理すべきであるか。問題の焦点はここにあるものといってよかろう。

二

さて思想史における価値観と歴史叙述の問題に関する村岡教授の見解は、その長い研究活動を通じ、極めて明確な一つの立場を保持

し続け、ほとんど動揺するところがなかったようにみえる。即ちそれは、何よりも先ず「歴史学」を一つの「経験科学」なりとする基本的認識に立って、あくまでもそうした「史学」の本領に徹するという態度を以て貫ぬかれているもののように見えるからである。思想史の方法に関する限り、いかなる価値もまた「史的事実」「史的存在」として科学的認識の対象とされるべきであり、研究者自身の絶対的立場からの価値判断・価値評価とは厳しく区別されねばならぬとする基礎的態度がそれである。これは後にも述べるように、教授における思想史学の本質に、深く結びついている見解であり、その点、村岡思想史学の重要な学問的性格の一面を形成しているものといっても過言ではなかろうかと思う。

この立場は、教授の数多い学問論、方法論において繰り返し説かれているところであるが、先ずここではその代表的な一例として、村岡教授最晩年の労作ともいうべき「日本国民性の精神史的研究」（村岡典嗣著作集、日本思想史研究V『国民性の研究』、所収。）について、この問題がいかに取扱われているかを探ってみるとしよう。この研究は一九四五年（昭和二〇）即ち教授他界の前年に講義として行われたものであるが、あたかも戦争最末期という異常な状況の中において為されたものであるにもかかわらず、我々はそこに「価値と歴史」の問題に対する頗る明快な立場の主張を看取することができるのである。即ちそこで当面の研究主題たる「国民性の精神史的研究」という学問的作業そのものに最初に述べられている次のような発言は、先ず以て注目すべきものであろう。

この研究は経験科学としての歴史学たる本質上、どこまでも Sein の問題であって、前述の道義的振興を目的とする規範的 Sollen のそれではない。否それと混同されてはならぬ。（『日本思想史研究』V。—以下単にVと略記。—八頁。）

この断定はまことに明快である。即ちその主張によれば、精神史あるいは思想史なるものは、その研究対象が、たとい直接我々の Sollen に関するものであっても、それをそのまま Sollen の問題として取り上げるのではなく、あくまでも歴史的事実即ち Sein の問題として扱うことをその本領とするというのである。戦時という社会状況の中において、「国民精神」あるいは「日本精神」などと呼ばれたものが、最大最要の国民的 Sollen として要請され、その鼓吹強調が世を挙げての風潮となっていた中で、民族の精神的性格を究明しようとする自らの研究を、あえて「道義的振興を目的とする」ものではないと明言しているのは、この点に関する教授の態度が、安易ならぬ積極的主張を持つものであったことを示すに十分である。

前記のような主張に引続いて、更に次のような発言がなされている。

併し、その故を以て決してその価値を軽視すべきでないと同時に、その本質に於いてあくまでも忠実であり純粋であらねばならぬ。（V八頁。）

この一節はやや簡略に過ぎて多少の補説を必要とする文であるが、教授の発言の主意とするところは次の二点である。即ち先ず第一は、この研究は前述のように必ずしも「道義的振興を目的とする」ものではないけれども、さりとてそうした研究の意義を過小に評価

すべきではないということであり、その第二はSeinの学はSeinの学としてそうした本質に忠実であり純粋であることが要請されるということである。要するにその言わんとしているところを再説すれば、「国民性の精神史研究」といわれるような学問的作業は、Seinの学としてそれ相応の存在意義を持つものであり、又これを意義あらしめるためには、この研究がSeinの学として、あくまでもその本質に「忠実であり純粋」でなければならず、かくてこそ自らの存在意義をも保持し得るものだというのである。更に付言するならば、ここに「忠実」というのはSeinに忠実ということであり、「純粋」というのはSollenとの混同がなされてはならぬということである。

では、そうした思想面、精神面におけるSeinの学の存在意義とははたしてどのようなものであるか。教授によれば、このように価値あるものをも歴史的事実とみて、その実相を経験科学的に認識すること、即ち純粋な史学的作業こそが、実はこれに関わる価値の発見や創造に対して、重要な基礎的意義を持つものであるというのである。この点については次のような発言がある。

けだし所謂日本精神を説くについては、まづ日本精神の歴史的に即ち如実に如何なるものかが、明らかにされねばならぬ。この事こそ日本精神の真義の宣揚の為めに必要なる前提であり又基礎である。この前提この基礎にたたざるかぎり、日本精神論は空疎なる感激にをはる傾きなしとしない。（V八頁。）

こうした発言が、挙国的な日本精神主義の風潮の中であえて為されていることに我々は或る種の驚きを禁じ得ないのであるが、そのことはともかくとして、SollenがSollenとして主張され鼓吹され信仰されるためには、その基礎その前提として、Seinの「如実」な認識こそが為されるべきであり、この前提を欠いたSollenの主張は「空疎な感激」、即ち実質をともなわぬ独善に了りかねないというのがその主意なのである。

而してそはこの歴史性に忠実であり純粋でないかぎり、往々にして単に希望的観測の過去に於ける投影を事とするに止って、その結果は決して吾人の知性を満足せしむるに足らないものとなる。かくの如きは学問研究の目的にそはないのみならず、また更に他方の日本精神の実際的立場の為にも決してよき効果をもたらすものではない。この点からして吾人は特に吾人の研究の目的が、わが国民性の精神史的意義の、如実にいかなるものかの闡明に存する事を改めて一言せねばならぬ事を感ずる。（V八頁）

まさに「国民性の精神史的研究」に際して特に「改めて一言」しなければならなかったのはこの点なのである。

要するに、村岡教授の「思想史」「精神史」に関する限り、学者の超越的価値観は、決して直接の形でその歴史研究・歴史叙述に参与すべきものではなく、客観的歴史学的立場からの理解や認識と、絶対的立場からの判断や主張とは、おのずからその次元を異にするものとして区別され、前者を本領とする思想史精神史は、ただ歴史学の科学性において純粋であることによってのみ、後者のためにも「必要」な「前提」や「基礎」になりうるという、いわば間接の関係にあるべきものとして把握され位置付けられているのである。教授が

思想史をもSeinの学と規定しているのはこうした意味においてである。

勿論このような考え方が、思想史の研究や叙述において、すべての価値判断が停止されねばならぬとするものでないことは、改めていうまでもない。思想史が、歴史的事象としての精神活動や、その所産としての文化財を主たる研究対象とするものである以上、あらゆる意味における価値判断や価値評価を全く停止して、その研究や叙述の行い得よう筈のないことは自明の事実といってよかろう。教授が主張し強調しているのは、そうした意味での判断停止ではない。その言わんとする意味は、思想史の研究や叙述においてなされる価値判断は、あくまでも歴史的相対的判断であり、超越的絶対的判断であってはならないということであり、漫然たる両者の混同や、不用意な移行が為されるべきではなく、両者はその任務と目的において明らかに区別されねばならぬものだというのである。

一体そうしたことが果して可能であるか、またそうすることが思想史にとって必要且つ妥当な方法であるか、また思想史とはそうしたものでなければならないのか、これらの問いかけについては当然様々の意見や考察が為し得るであろうが、ともかく村岡教授が自ら自覚し主張するところは前述のようなことだったのである。

三

「国民性の精神史的研究」に表明された前記のような見解は、実は必ずしもその晩年においてはじめて成立したというものではなく、いわば研究の初期から一貫して説かれ続けた一つの持論ともいうべきもののようである。教授の学者としての活動期間は全く戦前戦中に属しているのであるが、この期間がいわゆる「日本主義」の最も強調鼓吹された時期であったことは、改めてここに指摘するまでもないことである。こうした時代の中において、世上に国民的Sollenとして主張される「日本主義」と、学問としての日本研究とが、はたしていかなる関係にあらねばならぬかということは、日本思想史の学問的研究を任とする村岡教授の、絶えざる最大関心事であり、研究の基礎的命題とならざるを得なかったわけである。教授の日本思想史研究が、その当初からこの問題に対して厳しい学者的内省を示しているのもそのためであり、その生涯に亘る研究は、必らずこれに触れて、自らの立場を明確化しているのである。我々がここに改めてその跡を辿ってみることは、前節にみた教授の立場の本旨を、更に明確化することになると思う。そこで他の諸論文に現われた見解を、今一度洗い出してみることとしよう。

「日本思潮」は日本精神史の概説的論述として、一九二八年（昭和三）以降、岩波講座「世界思潮」に発表されたものであり、教授としては比較的前期に属する研究である。時あたかも大陸においては国民政府の樹立（一九二七）とこれに続く「北伐」が行われ、日本にもこの動乱を機に満州に事を構えようとする動きがあり、政治・経済・思想上の不安混迷と共に、まさに内外物情騒然ともいうべき時であった。そうした時勢の中において書かれたのが、この「日本思潮」であるが、その序説に「まず日本思潮てふ概念の意義と、その取扱ひ方とに対する視点の妥当を期せむが為に、二つの点について述べよう。」として、その第一に挙げられているのが、次のよ

うな意見である。

第一に、思ふに特に避けらるべきは、そを日本主義の主張と混同することである。問題とするところは、日本思潮の学問的闡明であって、日本主義の国民道徳的主張ではない。この両者が同一でないことは、目的の別なる点から明らかであるにも拘らず、両者の混同は、往々にして陥られ易い現象である。しかもその混同は、後者の任務を妨げるのみならず、又決して前者の為にも有効でない。日本思潮の正しい理解にもとづかざる主張は、しば〳〵根柢なき空論たるに終るべきからである。

（『日本思想史研究』第四。―以下単に『第四』と略記。―三頁。）

即ちここに学問として為される「日本思潮」の研究は、日本思潮の「闡明」（不分明なものを、ひらき明らかにすること）であり、決して直接的な「日本主義の国民道徳的主張ではない」、この両者は本来別なものであり、またそれぞれに目的を異にするものだというのである。我々は前節において、教授晩年の主張として見たものが、実はすでにここに確実な自覚として現われているのをみるのである。遠く中世にまでさかのぼり得る「神国観」を源流とし、近世国学の古代研究の上に開花した「日本主義」「国粋主義」の主張は、明治期を通じてようやく国民的普及を見、更に大正期に入り、いわゆる自由主義に対抗するものとして、「国民精神」「日本精神」「日本思想」が Sollen として、意識的意図的に主張され強調されようとしている時勢の中において、教授があえてこのような言明をしているのは、すでにここに「科学」としての思想史の基本的性格が、そうした信仰的主張とは本質的に別個のものとして把えられねばならぬという、学者的確信の成立を示すものといってよかろうかと思う。教授はすでに、昭和初期の時代的風潮の中に「両者の混同」を見、それが両者自体にとって互に進歩をさまたげるものであると指摘しているのである。

「国体観」の問題も、当時の思想界における重要テーマの一つであった。村岡教授が思想史学者として、これを一つの主要な研究課題としているのも当然のことといってよかろう。「国体思想」については、一九三五年（昭和一〇）以降同十九年に至るまで、各大学において連年講義されており、その全貌は「著作集」Vに、「国体思想史」として収録されているところによってみることができる。さて同書によって、この講義の「開講の辞」をみるに、そこにまた、本稿の主題に関わると思われる次のような発言がある。教授の立場を窺うに便宜と思われるので、やや長文ながら左に引用する。

ここに思想史として我国体思想の歴史、即ちその淵源と発展とについて講ずる。ついてはその初めに吾人はまづ、所謂日本思想史てふ学問が、はたして如何なる学問であり、如何に研究せらるべきかに関して簡単に一応述べねばならぬことを感ずる。けだしこの学問のまだ新しく殆んど未成立であるといふ事実と、之に加へて今日の非常時局の状勢とは往々にしてこの種、わが祖国の精神文化に関する研究を必ずしも正常を保たしめざるものあるが故である。即ち或は、学的論証を信仰的説教と混雑せしめ、或は更に同じ学的範囲に於いても、歴史的事実の闡明を規範的教義の主張と誤解せしむる如き、しばしば吾人の遭

遇するところである。事物がその本領に於いて徹底しないことは、ひとり理論的に正しくないのみならず、実際にもまた真の効果ある所以でない。日本精神文化の歴史的研究もその終局の目的は日本精神文化主義の為めであるのは言ふまでもない。しかもその事たるあくまでもその本領に於いてなさるべきであって、決して本領に徹底せざる、為にするところある功利的態度によってなさるべきでない。かくの如きは決してその終局の目的に貢献する所以でない。而して日本思想史の学的性質如何は後にゆづるも、そが学問であるかぎり真理の究明を唯一の目的とする事は言ふまでもない。この事は一方に懐疑の為の懐疑たる破壊的態度を容しえざるとともに、他方に真相の認識の為に一切の臆説に批判吟味を敢へてする事をむしろ求めしめる。けだし徹底的の学問研究こそは真価あるものの真価を真に発揮せしむる所以である。ここに主題とするわが国体思想の如きそれである。（中略）しかもかくの如き要請を以て、我国民的信念たる国体思想の如きを取りだし来つて見ると、そが盛んに説教せられるほどはたして論証せられたかと考へると、恐らくは何人も然りと答へるに躊躇せざるをえないであらう。或はその論証の如きを必要としないのが説教者の云ふところであるかもしれぬ。併しながらそは学徒の本分ではないことは已に明らかである。（V七九頁。）

この部分は一九三八年（昭和一三）の講義であるが、ここに述べられた所論も、すでに見てきたところとその本旨において全く軌を一にするものである。「非常時局の状勢」が「研究を必ずしも正常を保たしめざるものがある」という認識の下に、「学的論証」と「信仰的説教」との混雑や、「歴史的事実の闡明」と「規範的教義の主張」とを混同するような誤りの存在を指摘し、これは単に学問上において「真に効果ある所以でない」と共に、いわゆる「日本精神文化主義」をも益するものでないとし、学問研究はあくまでもその「本領に徹底」し、いやしくも「為にするところある功利的態度によってなさるべきでない」ことを強調しているのである。ではここにいう「為にする功利的態度」とは果して何を指しているものであるか。教授はこれについてここに語ることをしていないが、我々が若しここに改めて当時の学界思想界における「国体論」や「日本主義」の主張というものをふりかえってみるならば、その事例を拾うに特に困難はあるまい。むしろ事例は枚挙にいとまなしといっても恐らく過言ではあるまい。ただ当時において、その当事者は勿論、世上の多くの人々がこのことについての確たる認識を持つことが少なかったというだけのことである。日本主義全盛、日本精神絶対ともいうべき社会的動向の中において、「日本思想史」を専攻する学者たる者は、一応の皮相な見方からすれば、まさに得意の立場にあった筈だと見られるかも知れない。しかし実は、教授の学問はその本領においてそうした時代的風潮とは直接関わるものではなかったのである。前述のような教授の発言は、このような時勢の中においてなされたものとしてみられた時、特にその真義を明確化するのである。「一切の臆説に批判吟味を敢へてする事」をその学問の基本的要請とし、その国体思想研究もまた要するにその歴史的「真相」の「実証」を目的とするものに外ならないという自己規定的発

言も、そうした現実を踏まえてのものなのである。要するにここに見られる教授の立場は、何よりも「歴史的」事実の闡明と「規範的教義の主張」とを峻別しようとするものであり、思想史学はその「本領」においてあくまでも前者に徹底すべきものであるというのである。これはまた今まで見て来た教授の主張と、その基本的発想を同じくしているものとみることができるのである。

なおこの「開講の辞」には引続いて英人の日本学者チェンバレン Basil Hall Chamberlain の著書『新宗教の発明』The invention of a new religion における忠君愛国思想の批判、即ち明治以後の日本における忠君愛国の思想は日本古来のものではなく明治官僚の創作した新宗教に過ぎないという説について詳細な評論を加え、その最後に次のような見解をつけ加えている。

もし native scholars の間に Chamberlain をして納得せしむるに足るべき近代的研究が存したならば、この外人の日本学者は必ずしもかくの如き新宗教説を少くもそのままには為さなかったであらう。教授の如き自由と科学的正確とを神(てこ)とする外国人の真理の学徒をして首肯せしめ承認せしめる為めには単に自国の国民精神について自己を感情的に語るのみでは無益である。学問的に論証されねばならぬ。Chamberlain の新宗教説が我々の国民的感情に offensive であることは言ふまでもない。この点については吾人も亦当時の多くの論者と同感である。併しながら吾人は学徒としていたづらに憤激する前に、我々の研究の不完全さを反省しなければならぬ。しかも所謂国民精神の主張に於いて感激するに急で、反省し論証するにおそく、説教に盛んであるにも拘らず、学的論証に乏しい憾みは、決して今日といへども教授が新宗教発明説に劣らないであらう。而してかくの如き論証はまさしく我等学徒の任務に外ならないが、そは又決して必ずしも容易の事ではない。公正にして誠実なる学問的態度と妥当なる学問的方法とによって十分に対者の理性に appeal するものでなければならぬ。勿論単なる信念の吐露や感激の発表であってはならない。（V八七頁。）

ここには一つの具体的な事例に即して、教授の持論が述べられているわけである。チェンバレンの論は、明治以後の日本の社会において、国民的信念のようにみられている「忠君愛国」や「天皇崇拝」の思想に対し、これを明治官僚の創作に過ぎぬものとしてその伝統性を否定したものであるが、村岡教授は、この外国人学者の説に対する日本人の反応が、総じて感情的憤激に急であって学問的実証に欠けているという実状を指摘し、この外人学者のような「真理の学徒」を納得させるためには「国民精神について自己を感情的に語るのみでは無益」であり、「学問的論証」こそが必要であるというのである。国民精神の主張において、「説教に盛んであるにも拘らず、学的論証に乏しい憾み」は依然として現代の通弊であり、ここに対者の理性にアピールする学問的態度、学問的方法が必要とされるというのである。勿論ここに「感情」や「信念」などといわれているものが、直ちに当事者の「価値観」と直結するものであるかどうかは問題である。しかしその認識における態度の超越性絶対性という点においては両者その類を一にする面を持つものである。教授が主張するのは、これに対し、少くも能う限りの「客観的認識」を目的

とし本領とする「学問性」の確保に外ならなかったのである。

「日本精神」は戦前戦中の思想界を風靡した最も強力な思潮の一つであった。多くの学者・思想家・宗教家・教育者その他様々の人々がそれぞれの立場からこれを論じた。村岡教授もまた一九四三年（昭和一八）、「日本国家科学大系」の中に「日本精神論」を発表している。時まさに第二次世界大戦もようやく枢軸側（日・独・伊）に不利の情勢が見えはじめ、この年の二月にはスターリングラードの独乙軍降服、ガダルカナル島の日本軍撤退、やがて五月アッツ島守備日本軍全滅、九月イタリーの無条件降伏と続く頃である。勿論教授のこの「日本精神論」は「昭和十八年三月十七日稿」と明記されているから、その後の状況はまだ予知すべくもなかった時ではあるが、すでに前年五月には東京に初空襲があり、日本本土そのものが戦場と化しつつある時であった。こうした時勢の中において発表されたのがこの「日本精神論」であるが、その所論は総じてまことに冷静そのものであり、どこまでも歴史的事実の学的解釈とその客観的叙述を目指しているものということができる。少くもそこに感情的な説教や鼓吹的な論義の色彩がないことは改めて認めざるを得ぬところである。しかもその「序説」の部分には、このことが明らかに自覚的な教授の学問的態度であることを、例によって次のように記しているのである。

ここに吾人が試みようとする日本精神論は、日本精神の鼓吹とは自ら別である。吾人の知性を対象としての論究である。日本精神とはいかなるものかを明らかにするのを主要な目的とし、それにもとづいて自らその価値を発揮するとともに、多少の批判にも及ばうとするのである。（中略）もしそれ、日本精神の語が現時盛んに流行される結果、一方輿論の有する感情的性質や群衆心理的傾向に、多少とも累せられて、所有することを避けえない種々の性僻のたぐひは、以上の如き考察によって、思ふに之をその本質的のものから区別するを得ねばならぬ。而してこれまた、吾人の所期する学的研究の、重要なる任務でなければならぬ。（『第四』一八八頁―九頁。）

「日本精神」といえどもその学問的研究があくまで学的でなければならぬなどということは、戦後の現代においては、改めて言挙するまでもない自明の事実であるといわれるかも知れない。しかしその「鼓吹」こそが最大の急務として叫ばれている時流の中において、みずからの研究を、あえて「鼓吹」ではなく「知性を対象としての論究」であると言明しているのは、問題に対する筆者の態度が、すぐれて明確堅固なものであったことを示すに十分であるといってよかろう。しかもここに「価値の発揮」「多少の批判」といわれていることについても、その「結論」に述べられているところからみると、それは決して「絶対的価値判断」や「超越的批判」ではなく、あくまでも史実に即した「価値の闡明」であり、事実に内在する「短所の指摘」という意味に外ならないことを知り得るのである。次の結語はよくそのことを語っているものといってよかろう。

日本精神の遵奉者のためにも、最も戒むべきは、日本精神の本願ぼこりであらう。もしそれ、凡ての方面に於ける学問の研究の振興が、この目的の為にも、必ずしも直接でなくとも極めて重大なる意義を有することは、忘れてはならない。けだし学問こ

そは、反省や自覚の原因であるからである。而して特にこの場合、我国の歴史的文化に対する真の研究の開拓は、――とかく最も閑却されたし、またされる傾きのあること、序論に言及した如くであるにも拘らず、否それだけに最も緊要である。（『第四』。二七一頁。）

以上村岡教授の各期における主要な研究から、主として「価値観と歴史叙述との連関」について教授が自ら言明しているところを探って来たのであるが、少くもその基本的な態度に関する限り、それはまさに終始不動のものがあったように見える。即ちそこに反復主張されているところの根本は、要するに思想史を純粋な歴史科学たらしめようとする立場である。いわゆる価値の問題にしても、学としての思想史は、あくまでも Sein の客観的認識を本領とするものであり、Sollen の主張とは本来区別されるべきものであるというのである。そしてこのような Sein の認識を本領とする学問的営為は、「必しも直接でなくとも」 Sollen の発展に対して「重大な意義」を持つのであり、その為には自ら「学」として純粋であらねばならないというのである。

四

「価値観と歴史叙述」に関する以上のような見解が、当然「日本思想史」の本質論に関わっているものであることは、すでにこれまでの観察によっても明らかであろう。「日本思想史」についての村岡教授の学問論は、いくつかの著書論文に述べられているが、その中で最も詳細且つ、代表的なものとしては、前記「国体思想史」の序論となっている「日本思想史の概念、学問的指向及び研究法」を挙げることができようかと思う。今ここに教授の学問論を全面的に取り上げるいとまはないが、ただ前節までに見て来た主題に関わると思われる点について、同書の所説を探ってみるとしよう。

村岡教授の日本思想史論は、大きくこれを分って、その形式的規定と実質的規定ともいうべき二面に把えることができようかと思う。即ち形式的規定とはいわば理論的抽象的規定であり「文化史の意識的方面」という論がそれである。これは教授自らもいっているようにヴィンデルバント、リッケルト流の「文化史観」を背景としているもののようである。これと共に教授の日本思想史観において最も特徴的なのは、東西の在来の教学即ち西欧十九世紀における Philologie 及び近世日本における「国学」の両者を、思想史の先蹤と見、これらから重要な学的性質と研究方法を受けつぎつつも、結局「文献学としての国学の史的文化学的完成」に日本思想史を見ようとしていることである。いわばこれは教授における日本思想史の実質的歴史的規定ともいうべきものである。

このような学問観は、前節までに見て来た教授の立場に深い関わりを持つものである。先ず思想史を以て「文化学的歴史観」の上に立つ史学とみる立場からは、これは「自然科学的史観」が「個々の史実の集合のうちから帰納して何等かの普遍的法則を立て、その法則によって史実を統一しようとする」のに反対するものであるとし、「文化学的史観」における独自の歴史的統一の存在と可能性を認め次のように述べている。

自然界に於ける因果の過程は repetition であって歴史でな

い。歴史は学として経験的事実の綜合統一を即ち関係付けを要する点は、もとより自然科学と同じいにかかはらず、その関係付けの意義は自然科学のものとは異るので、そこに歴史の本質的意義が在する。即ち歴史の為す綜合統一は自然科学的の一般法則化ではなくして、個性的事実に基いての、換言すれば特殊の価値に於いてのそれである。而して個性的事実たる意義は繰返すべからざる特殊の経験といふことに存在する。かかる経験の特殊的意義の発揮がやがて歴史的方法の目的である。而して、こはある特殊の中心事実の価値を他の諸々の事実の価値のうちに認識すること、即ち価値関係に於いて見ることである。しかも、こは価値判断とは明らかに区別すべきで、そこに歴史が規範学でない所以が存する。（V。一〇四頁。）

即ち文化学的史観に立つ歴史学（思想史もこれに属するものとされるのであるが）は、自然科学的一般法則によって史実の統一を企てようとするものではなく、繰り返すことのない特殊的な価値を史上における相互の価値関係において把えることを目的とするものであり、その点において超越的価値判断と区別され規範学と区別されるべきものだというのである。思想史的研究を以って、文化価値を扱いつつもしかも Sein の学と規定する所以はこうした学問観に由来しているものということができるのである。しかもそうした「文化学的史観」なるものは、単に理論的に妥当なばかりでなく、実際の歴史家の歴史叙述の経験に徴しても適切であるとし、次のような見解が述べられている。

凡そ歴史家にして自ら反省するならば、必ずや歴史をクリエイトしてゆく自己の主観の活らきに対して基礎となり証拠となる史実とその関係とがあり、そが自己の主観の超越を制約する対抗性として常に存することを自覚せざるをえないであらう。いかにも超越して、はじめて真に理解しうるにもかかわらず、しかもあへて超越しないところに歴史が存するので、このあへて超越せざるものが歴史の客観性である（V。一〇六頁。）

歴史が史家の全く恣意的な創作とならず、その科学的客観性を保持し得るのは、史家の主観の活動に対して「その基礎となり証拠となる」と共に、その「超越を制約する対抗性」として史実が存在するからであるというのである。このことは更に具体的な研究法の問題に至って次のようにも説明されている。

例えば古代の倫理思想史を考へむとする場合には、倫理思想といふ見地から記紀等の古典について、もとより歴史的価値の有無大小につき、その内容の取捨を行ふのである。而して、この際注意すべきは、道徳的判断と混雑しないことである。もとよりそれが基礎とならないでは、道徳的価値関係を明らかにする事は出来ないが、その判断は歴史としてあくまでも内在的でなければならず、超越的であってはならぬ。（V。一一一頁。）

史上における道徳的価値関係を究明するという作業は即ち道徳的判断ではない、この両者が混雑されてはならないということが繰り返し主張されているのである。歴史的認識の客観性は、そこに保証されるものだというのである。この点は更に実際的に、次のような解説ともなっている。

而してこの歴史的構成に存する主観的もしくは芸術的創作性

を客観的に妥当ならしむべきものは、いづこに求むべきかといふと、やはり個々の資料に対する釈義、その関係に於いて見ての時間的系列の正当等が条件として存する。資料たる文献の曲解やその文献の間の時代的前後や交渉関係の有無等の無視等はあくまでも避けられねばならぬ。（V。一一二頁。）

即ち研究の具体的作業に即していうならば、研究者の前に動かし得ぬ歴史の証として存在している文献、また確かに存在した筈の時間的系列、そうした史実を曲解せず無視せず、これを能うかぎりあるがままに理解し認識しようとするところに、思想史研究の学的客観性の根拠が存在し得るというのである。

これらの発言によって、「価値観と歴史叙述」の問題に対する村岡教授の見解を、背後から支える学問論的根拠の要点を察知することができようかと思う。

五

最後に村岡教授の思想史論の極めて特徴的な性格ともいうべき、いわゆる実質的規定、即ち Philologie 及び国学と思想史との実質的関係について触れねばならぬわけであるが、これについて論ずべきことは頗る多く、到底よくこの小論に尽し得るところではない。そこで一切これは別の機会にゆずることとし、ここにはただ本稿の主題たる「価値観と歴史叙述」に対する教授の前述のような態度に、重要な関係を持っているとみられる、その「文献学」理解の一端を示して、今後の考察のための参考に供するに止めておきたい。即ち、日本思想史の「学問的志向」を論じたところに、Aug, Boeckh (1785—1867) の Philologie について

即ち訓詁註釈的の形式的語学的研究を手段として、古典の内容的方面、即ち思想を認識する事で、その認識が再認識たる点に於いて哲学や他の学問と異る。即ちその再認識たる性質に於いて、あくまで主観的 Production とは別に、客観的 reproduction たるべきところに学的本領を要求する（V。九六頁。）

といい、また本居宣長の国学について

学問としての方面に於いて宣長の学問はその形式的語学的研究を前提として古典の内容的研究に及んだ system に於いて、殊に又 production と reproduction、認識と再認識とを明らかに区別して、後者に於いて徹底したこと等に於いて、最も Boeckh の Philologie に比すべきものであり、Japanische Philologie は彼に於いて成立を見たといひ得る。（V。九八頁。）

と述べている如きがそれである。Philologie 及び国学をこのような学問として把え、これを日本思想史の先蹤を為すものとした学問観は、すでに見て来た教授の意見、即ち思想史を以てあくまでも Sein の学と規定し、これと Sollen の学との間に一線を画そうとした立場に、頗る近似的な実質的連関を示しているものともみることが出来ようかと思う。

以上多少の資料に即して村岡教授の立場を見て来たのであるが、要するにその思想史は、価値の問題を扱いつつもそれが文化史学であるという基本的な性格において、常に Sein の学として指向されていたという点に帰着し得るもののようである。「価値観と歴史叙

述との関連」についての見方も、終始その基盤の上に立っていたものということができるのである。

こうした立場に対しては当然様々の角度からの批判が可能であろう。しかし一方その主張自体が、全く時勢を異にする現代において、新たな問題を提示していることも事実といってよかろう。

附記（本稿は、日本思想史学会昭和四十八年度大会――同年十月二十八日、会場学習院大学――における主題発表「村岡典嗣氏の思想史の方法」の一部を整理改稿したものである。昭和四十九年八月一日稿。）